

近代日本の「古典復興」 —子規における〈古代の発見〉—

*Renaissance in the Modern Japan:
“Discovering the Ancient Japan” of Masaoka Shiki*

徐 青

XU Qing

浙江理工大学外国語学院日本語学科
*School of Foreign Languages, Zhejiang Sci-Tech University,
Hangzhou 310018, China*

Abstract

Abstract: Masaoka Shiki leads to modern haiku hobby, and advocated the prose sketch, and respect the Manyo style, sparked a great response to the literary world of the mid-Meiji era. Even in the current academia, Shiki's re-recognition of "classical value" has been given a high evaluation as usual. First, this paper organizes the over view of important Meiji era of "classic revival" in the modern Japanese national formation process, based on the position of Shiki in the literary world and features of Japan Meiji period, and considers the significance of Shiki's "discovered ancient" in the modern Japan. And, there was a chance to increase the linguistic artistry. In other words, it in the re-constructed the aesthetics of modern Japanese. This paper in focused on this point.

Key words: Modern Japan; classical revival; Masaoka Shiki; discovering the ancient

一、はじめに

日本著名俳句詩人正岡子規（1867—1902）の生涯や、創作した俳句、および俳句、短歌、「写生」散文革新などに関する研究は、これまでに汗牛充棟である。たとえば、今年（2014年）は日清戦争120周年忌であるが、子規が大きく関わった新聞『小日本』創刊120周年にも当たる。そこで、本稿では、子規とこの『小日本』との関わりを通じて、子規の時代に共有されていた思想の問題について考えてみたい。

新聞『小日本』の「命」は非常に短かった。1894年2月11日創刊から、わずか5か月で終刊した。しかし、その影響がけっして小さいものではなかったことは、2014年7月24日、子規の生まれた故郷松山市にある松本市立子規記念博物館3階特別展示室で、

第 60 回特別企画展「子規と『小日本』——新聞界の旋風」が開催されたことにも伺い知ることができる。その特別企画展開催中の 8 月 3 日には、陸羯南研究会の高木宏治¹⁾氏による記念講演、「羯南『日本』、子規『小日本』」も行われた。

子規の名は、日本だけではなく、中国においても研究者の間ではむしろ良く知られているが、より大勢の中国人にその名が知られるようになったのは、2009 年 11 月、歴史小説家司馬遼太郎の『坂の上の雲』がドラマ化され、NHK が 3 年間に渡って放送してからのことである。だが、それによって、日中両国間で大きな波紋が起きた。その一端をここでまず紹介しておくことにする。

鮑同と趙聡の論文「日本『戦記物語』における歴史観の錯誤を論ずー『坂の上の雲』解析²⁾」では、「当該ドラマは、わざと歴史の叙事リズムを乱し、随意的に歴史物語を解体し、つなぎあわせ、かつて侵略された国に対する基本的な尊重もない。それは歴史への反逆にほかならない」と評した。

また、張秀強の「日清戦争期における近代日本文人の戦争観³⁾」における子規に対する評価は、次のようなものである。「日清戦争後一、二年間における作品では、子規は当時の時事に強い関心を持っていた。そして、日本軍隊の勝利に対しその功績をむやみにほめたたえた。その極端で扇動的な文章は、日本兵士が国のために生命をなげうち奮い立ったことを集中的に反映したものであった。子規は日本軍国主義思想に深刻に浸透されていた⁴⁾」。

以上両論文に見られるように、こうした当時の状況とそれに伴う子規評価は、言うまでもなく日清戦争期における日本ナショナリズムなどの問題と直接関連している。したがって、その時代の実相と子規という人の実際とを、さらにより深く探求する必要がある。

『坂の上の雲』は、近代日本国家の形成過程を、日本陸軍、日本海軍の近代化に貢献した秋山兄弟の、日清、日露戦争における活躍を軸に描くとともに、彼らの同郷、友人でもある子規の生涯について、興味深い記述を残している。それは、しばしば作品世界や文学史上の枠組だけで論じられてきた子規のイメージに、新たな光を当てたものであった。つまり、『坂の上の雲』では、秋山兄弟同様に近代日本の国家形成過程の中で子規が生きていたことが鮮明に描かれているばかりでなく、子規という、国家権力の構造から距離のある文学を担う人物の生涯を借りて、近代日本のナショナリズムの展開が

1) 高木宏治 (1958 -) 筑波大学非常勤講師、住友信託銀行前上海駐在員事務所首席代表。著書:『東亜時論』(三巻)、『東亜同文会報告』、『明治中期分県地図——新聞「日本」附録』など。

2) 鮑同、趙聡. 論日本“戦記物語”中の錯誤歴史観——解析『坂上雲』、『中国電報』、2013 年第 9 期。

3) 張秀強. 甲午戦争中近代日本文人の戦争観、『東北師大学報』、2009 年第 2 期。

4) 1895 年 4 月 15 日から 5 月 14 日まで、子規は新聞『日本』従軍記者として戦地に出かけ、その後、『陣中日記』、『従軍記事』、『金州雑詩』などを書いた。

実によく分かる作品でもあるのだ。

ある国についてより深い認識を得るには、その表面的な歴史現象を研究しなければならないことはいうまでもない。そしてさらに、その現象発生の原因についても深く研究していく必要がある。

本稿では、そのような視座から子規に焦点を当て、なぜ子規が日本の詩歌の「革新」を導くために日本の〈古代〉を発見していったのかという問いを、近代日本ナショナリズムの構築過程における〈古代〉の再構築といった問題と関連づけながら確認していく。

近代日本に限らず、それぞれの国民国家にとって、そのルーツを構成することになる〈古代〉世界を、いつどこでどのように認識していくのかということは、当該の国民国家の存在根拠ともなるきわめて重要な作業である。さらにいえば、そうして〈構築された古代〉を、国民の共有知としていくことによって、当該の国家の紐帯をより強化することにもなる。さまざまな「神話」を国民国家形成にどのように活かすのかによって、当該の国家の正統性もまた問われることになる。

明治維新という一種の「王政復古」の形で旧体制を崩壊させた近代日本にとっての〈古代〉とは、まさにその「王政」の起源を探ることによって現出されるものであろう。

本稿は、まず、子規とその時代の性格を確認したうえで、近代日本ナショナリズムの形成過程の一環としての明治期におけるいわゆる「古典復興ブーム」の概況を押さえる。そして、そうした時代の文脈から、子規が『万葉集』を、近代日本の意味を付加しつつ「発見」していく過程を辿ることにしたい。

さらにその「古代文化の再発見」によって、「日本人」を組み立てていく要素を文学者たちが創作していくことは、〈日本人の境界〉が時代状況に応じて作られていくことなのだという事を見る。むろん、それは、子規がナショナリストであったことを単純に言挙げするわけではない。近代日本の形成過程の一つのある段階において、近代日本語の美的感覚をも再構築するような芸術性に高める契機がそこにあったことを論証することにこそ、比重がある。その後の日本がアジア侵略に転化するような傲慢とは一線を画する何かが、そこにはあるはずであろうことについても考察を深めたい。

二、子規とその時代

「ホトトギス」の別名は「子規」、「催帰」である。「ホトトギス」は、昼夜叫び止まず、声が悲しく、口内上皮や舌の部分は赤くなっている。そうした「ホトトギス」説は中国にも古くからある⁵⁾。子規という名号はまさしくこの「ホトトギス」からきたものであり、彼自身の運命を暗喩したものである。

5) 参考：白居易（唐）『琵琶行 終尾』「其の間旦暮何物をか聞く、杜鵑は血に啼き猿は哀れに鳴く」。

子規、原名正岡常規、日本の四国の愛媛県松山地区に生まれ、幼い頃から、母方の祖父である漢学者大原観山⁶⁾ (1818 - 1875) のもとで漢文古詩を学び、分厚い漢学の見識を固めた。のちに子規が創作した俳句には、子規は主に古俳句を模倣し、同時に、和歌や源氏物語、古い漢詩、老荘などの古典精華を吸収していたことを、見出しうる。広い古典文学教養はその創作の源となっていた。

1883 年、子規は愛媛一中（その愛媛一中の同級生の中には、後の日本海軍参謀秋山真之がいた）を中退して上京し、東京大学予備門に入学、その後、後に作家となる夏目漱石と知り合った。1890 年、子規は帝国大学⁷⁾ 哲学科に入学、翌年、国文学科⁸⁾ へ転学した。その頃、すなわち結核による咯血の直後から、「子規」と号した。

子規が生きた時代は、一言で言えば、「日本人」が作られた時代でもある。近代国家建設の高揚感に包まれた明治日本は、ヨーロッパが 500 年かけて成し遂げた近代への移行過程を、開国からわずか数十年でキャッチアップするという巨大な文化革命に挑んでいた。周知のように、その近代日本は自然にできあがったわけではない。それが一つの国民国家として構築されていくには、さまざまな領域のさまざまな過程が存在した。

子規が生きた時代は、上からの政治的な中央集権国家形成を推進する強力な権力の行使によって新たな政治支配体制を制度化していく過程があったと同時に、それまで「藩」などという社会の単位で支配されていた人々を、「日本人」や「日本国民」に仕立て上げていく過程も必要とされた。「国家」としての日本がそれを必要としたばかりでなく、そこに生きる人々自身にとっても、自分たちはどこから来てどこへ行くのか、といったアイデンティティの構築なくしては生きていくこともできないような過程が、そこには必要とされた。

また、国際関係に目を転じると、明治期を通じて重大な外交課題であり続けたのが、幕末以降、日本が列強各国と結んだ不平等条約の改正交渉だった。一般に、治外法権と関税自主権の回復が目的とされたが、これらはいずれも日本の内政問題と密接に関係していた。たとえば、通説の如く、富国强兵をスローガンに、殖産興業による輸出産業の育成を目指しながら、一方でインフレに悩まされる日本にとって、関税を自分たちで決められないという事態は大問題だった。

すると、逆説的だが、この関税自主権の回復は、明治日本に深刻な煩悶をもたらした。

6) 大原観山 (1818-1875)、伊予松山藩士加藤重孝の次男、大原家の養子、昌平坂学問所舎長、松山藩藩校明教館教授。外交官、貴族院議員加藤恒忠はその三兄。

7) 現在の東京大学の前身である。明治 10 年 (1877 年) 官立大学として創立する時は東京大学と称し、明治 19 年 (1886 年) 京都帝国大学創立により東京帝国大学と改名。戦後の学制改革後、昭和 22 年 (1947 年) に東京大学という名を使い始めた。

8) 明治 40 年 (1907 年)、京都大学に文科大学を創立した。ここでの「文科大学」というのは、上述帝国大学の下で機構である。

国家と国民が一九一〇年となって目指してきた大目標がある程度達成されたことで、進むべき目標を見失ってしまったからである。「坂の上の雲」がぐっと近づいてきたのだともいえる。むしろ、ヨーロッパ諸国から見れば「未完の近代化」に過ぎなかったかもしれない。しかし、日本人の想いとすれば、精一杯に上り続けてきた「坂道」であった。

そして近代日本の状況を見渡せば、子規の時代は、薩長両藩を主とする藩閥全盛期でもあった。子規の後輩の水野広徳によると、「僕の青少年時代の日本は、薩長両藩を主とする藩閥全盛期で、藩閥の息の掛からぬ者は人にあらずの観があった。無識無知無能、唯傲慢と蛮骨との外に取柄の無き人物が、単に薩長人たるの故を以て、県令知事の職を辱しめた者の多かったことに依っても之を知ることができる。従って非藩閥の無能者は使って貰えず、有能気概の士は野に隠れて出でずで、僕の中学校時代に、郷党の先輩として文武の官に名を列したる者は、文官としては池田謙蔵、野中久徴、内藤素行、山本忠彰等の諸氏あるも、せいぜい課長級程度にして、殆んど言うに足らず、又武官としては陸軍の秋山好古、仙波太郎の両氏がなお大尉か少佐ぐらいに過ぎなかった」⁹⁾。

薩長両藩のうち、伊藤博文や大久保利通などの明治維新の指導者もいたが、もちろん、子規の〈可能性〉とはまた異なる。子規は文科大学へとエリートコースを進みながら、それを退き、短歌・俳句の革新の道を歩いて夭折する。

三、明治の「古典復興」¹⁰⁾ ブーム

後に世界の五大国に数えられるに至った日本が、そこから先に進もうとすると、領土の拡張、植民地の獲得に関心が向くことはある種の必然であるが、そこに至る過程において何が起こっていたのか。

明治時代に西洋文化が導入され、男性の頭からチョンマゲが消え始めると、女性の髪形にも変化が生じる。外交を盛んに行うようになった上流階級の令嬢は、明治16年(1883年)に鹿鳴館が建てられたことをきっかけに、社交の場へヒップや腰上部を膨らませたバスルスタイルで繰り出すようになり、それに合わせた「夜会巻」など、和洋折衷の髪形が現れ始めた。日清戦争中には愛国心が高まり、日本髪復興も見られるようになったが、日露戦争の頃には「庇髪」(または、「二百三高地」髪型)¹¹⁾と呼ばれる髪形が流行し、女学生を皮切りに日本の隅々まで広がるようになった。こうしたブームは、ただ

9) 水野広徳『水野広徳自伝——平和を訴え続けた軍人の半生』、1978年、南海放送。

10) 「日本国民の古典」を樹立した1890年という年を「古典復興」と呼んだのは、長谷川如是閑(1875-1969)である。また、土岐善麻呂(1885-1980)はこれを「国粹保存」と称する(品田悦一は、『万葉集の発明——国民国家と文化装置としての古典』、2001、63頁において、それを「現象の指摘としては正しいし、ある意味では当事者の意識にそくした呼び方でさえある」としている。)

11) 加藤周一等編集『改定新版 世界大百科事典』、平凡社出版、2007年。

髪の様式に現れただけではなく、言語、演劇、宗教など日常生活の各領域に及んだ。とりわけ、1890年にあらわれた「古典復興」ブームは画期的であった。

いうまでもなく、もっとも日本の国民的な特徴を表すことができるのは、「国語」である。幕末の1868年、前島密は『漢字御廃止之議』という建議書を将軍徳川慶喜に提出したことがあり、明治維新後の日本における国語政策の中でも、もっとも主要な問題は、「漢字廃除」と「漢字制限」であった。

政治家によって進められてきた国語改良運動と二葉亭四迷らの文学者による「文言一致」への試みを同時に教育現場に反映させるため、明治33年(1900)4月2日、文部省は前島密らに国語調査委員を委嘱した。この委員の調査に基づき、小学校令で仮名の字体や学習すべき漢字を定めた。初等教育での国語教育の標準化は現代的な口語文を生むもととなった。この時期の「文言一致」運動の本質は文字改革、いわゆる「漢字御廃止」¹²⁾にほかならず、「古典復興」ブームにおける核心的な問題は、「中国文化支配」への抵抗的な「政治闘争」とも言えるのである。

日本における「国語政策」の立脚点は、弱体化した清朝が日本への影響力を弱め、西洋列強との平等な関係を構築しようと近代化への改革を行い、西洋列強に対抗できる近代国家になろうとしていたことにあった。日本が西洋文明の「一つの国、一つの民族、一つの言語」の重圧の下で、言語を統一する改革を行ったのもそのためである。同時に独立近代国家として必要な「伝統」をも構築しなければならなかった。

こうした「国語政策」や「伝統の創造」をめぐる、20世紀末学術研究方法論として広く読まれたアイゼンステインの『印刷革命』、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』、そして、エリック・ホブズボウムの『創られた伝統』などがある。国民国家論の観点から展開された議論として、たとえば、『創られた伝統』所収のトレヴァー＝ローバの論文「伝統の捏造——スコットランド高地の伝統」では、スコットランドの伝統衣装と伝統楽器などについて「すべては19世紀初期に作られたものである」というテーゼを、具体的な事例に即して実証している。

これに倣っていえば、明治期における「古典」という言葉についても「伝統」と同様であるといえよう。

中国近代において古典的知性を極めた王国維は、「古雅なるもの」の美しさには自然美と異なる芸術美があると論じ、「わたしたちが古雅だと判断するのは、実はわたしたちが今日的なところから判断している」のだと述べている。

明治23年(1890年)に興った「古典復興」ブームは、日本の「国民古典」を確立し

12) 柄谷行人によれば、実際漢字を廃除するかどうかは問題ではなく、問題の本質は、「文」(漢字)の優越的な地位が根本的に転覆されたこと、すなわち、音声文字が優越な思想指導の元で転覆されたことにある。

ていった。『日本文学全書』¹³⁾、『日本歌学全書』¹⁴⁾、『国文学読本』¹⁵⁾ および『中等教育日本文典』¹⁶⁾ などが出版された。

特に、ヨーロッパ国民文学史を真似して編集した日本最初の『日本文学史』¹⁷⁾ では、『万葉集』と『源氏物語』を日本文学の至宝であると評価していった。さらに、『万葉集』を「日本の詩経」と看做していった。

東京大学教授品田悦一（2001）によれば、これらの「日本文学」から、つまり、和漢古典の中から漢文学作品は完全に排除された。これらの動きは、明らかに、「日本の古典」を定義するためであり、ここにおけるいわゆる「古典」は「日本語作品」にはかならない。こうした仕事のために動員されたのは、当然当時の帝国大学の学者たちであった。なぜなら、帝国大学それ自体、国民国家形成の重要な基体であったからである。

上述の如く、この時期『万葉集』はすでに「日本国民の古典」として最高の地位を獲得した。その「地位」を支えるため、一般に「万葉国民歌集観」と呼ばれる視点が導入された（品田 2001）。すなわち、天皇から一般庶民までの古代における国民の声を、明治期各階層の日本人が吸収し、古代の貴族の歌と民衆の歌は「日本」という民族文化の基礎に根を下ろしたのだと理解する視座である。これが長らく『万葉集』についての一般通念となった。

また、その頃から、「日本人論」がさかんに登場しはじめた。明治 21 年（1888 年）4 月、三宅雪嶺の創刊した雑誌『日本人』（1902 年に『日本及日本人』と改名）。明治 22 年（1889 年）2 月 11 日、神武天皇が即位した紀元前 660 年 2 月 11 日を日本建国記念日とし、日本帝国憲法が発布された。同日、子規にとって生涯の恩人である陸羯南（1857-1907）¹⁸⁾ は、新聞『日本』を創刊した。

その創刊の辞で、「新聞紙たるものは政権を争ふ機関にあらざれば則ち私利を射るの商品たり。機関を以て自ら任ずるものは党義に偏するの謗を免れ難く、商品を以て自ら居るものは或は流俗を趁ふの嘲を招く。（略）我が『日本』は固より現今の政党に關係あるにあらず。然れども亦た商品を以て自ら甘ずるものにもあらず。吾輩の採る所既に

13) 1890-1891 年博文社、全 24 卷。

14) 佐々木弘綱（1828-1891）と息子佐々木信綱（1872-1963）編著、注釈。東京博文館。また、1927 年佐々木信綱は『新訓万葉集』を編著、岩波文庫。

15) 芳賀矢一と立花銑三郎など編著、1890 年 4 月富山房。

16) 大槻文彦著、1898 年、野村宗十郎（現代デジタルライブラリー参照）

17) 日本史学家三上参次（1865-1939）と教育家、国文学家高津敏三郎（1864-1921）共著、1890 年金港堂。

18) 陸羯南（1857-1907）、弘前藩（青森県）出身の記者、政治評論家。勤めていた内閣官房局を辞職し、明治 21 年（1888）に小村寿太郎らの支援を受けて『東京電報』を創刊した。だがすぐにうまくいかなくなり、翌年には改組し、新聞「日本」として社長兼主筆となった。過度の西洋化を戒め立憲政治の確立を目指す「国民主義」を唱え、藩閥政治や不十分な条約改正を批判し、発禁処分を受けることも多かった。正岡子規を厚遇し、新聞内で連載させたことでも知られる。

一定の義あり。(略) 先づ日本の一旦亡失せる『国民精神』を回復し且つ之を発揚せんことを以て自ら任ず」と述べ、さらにまた、「『日本』は国民精神の回復発揚を自任すと雖も、泰西文明の善美は之を知らざるにあらず。其の権利自由及平等の説は之を重んじ、其哲学道義の理は之を敬し、其風俗習慣も或る点は之を愛し、特に理学、経済、実業の事は最之を欣慕す。(略) 故に『日本』は狹隘なる攘夷論の再興にあらず。博愛の間に国民精神を回復発揚するものなり。」そして、「是の故に、『日本』は必ずしも二十三年を俟て多数を国会に占めんと欲する一政党派の欲望を充たすの目的あるにあらず、又徒らに文を舞はし筆を弄びて無責任の言論を恣にするものにあらず。『日本』は日本の前途に横はる内外の防障を排し、『日本国民』をして其天賦の任務を竭さしめんことを謀るに在り。」¹⁹⁾と声明している。

明治 24 年 (1891 年) に、三宅が『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』、明治 27 年 (1894 年) に内村鑑三が『代表的日本人』を公表している。これらの単著、雑誌、新聞の出版によって、当時の「日本人の国民意識」は形成されつつあった。

四、子規と新聞『小日本』

明治 35 年 (1902 年) 時点においては、陸は雑誌『日本人』の「社説」を担当すると同時に新聞『日本』の発行人でもあり、周知のように、新聞『日本』と雑誌『日本人』は一心同体的関係にあった。

前節にみたように、『日本』の創刊日は大日本国憲法の発布と同じ日の 1889 年 2 月 11 日であって、また、この日は日本の建国記念日でもある。

陸羯南研究の通説においても、陸の思想的体質は、新聞『日本』によく反映され、『日本』の紙面におのずから染み出ており、その思想はナショナリズムでありながら、陸もその社員である政教社のナショナリズムの特徴と同じく、明治 10 年代後半の条約改正運動にともなう欧化主義への反動として起こったものと似かよって、復古的反動思想や排外主義の性質を帯びてはいないとされている。それは、陸のナショナリズムが強調するのは、国民的意識の情感面だからである。

「新聞記者」という社説 (明治 23 年 [1890 年] 10 月 22 日 - 26 日)²⁰⁾において、陸は「機関新聞と独立新聞」という見出しでそのちがいを大要次のように述べている。「独立新聞」は政党の機関新聞でないという点で、営利新聞と外形がまぎらばしいかもしれない。しかし営利新聞は第一に多数の読者を得ることを目的として、「一定の見識」を必ずしも必要としない。そこがちがう。「独立新聞」は重要な事項にはいちいち「一定の識見」

19) 西岡長寿、植手通有編集『陸羯南全集』第二巻、1968 年 pp.3-4 参照。

20) 西岡長寿、植手通有編集『陸羯南全集』第二巻、1968 年 p.738 参照。

にもとづく判断をつけ、世人の気に入られることを目的としない……。

このように、陸の用語を借りれば、『日本』は、『朝日』や『国会』のような、どの派閥にも偏ってない、営利とする新聞でもないという思想をもった「独立新聞」であった。「独立新聞」という抱負は、陸が『日本』の発行当初から抱いて最後まで変わらなかったものである。

子規は、陸の友人加藤恒忠²¹⁾ (1859 - 1923) の甥として陸と知り合い、陸は、子規の俳句に対する改革を支持し、また、子規の生活の面倒も見ていた。子規と陸が正式に交流し始めたのは、明治 25 年 (1892 年) 2 月 29 日である。子規は結核のため大学を辞め、俳句の研究を専心した。

子規が正式に『日本』新聞社で仕事をしはじめたのは、同じ年の 11 月 18 日であった。当時、彼の月給は 15 円であった。子規は叔父大原恒徳への手紙の中で、次のように記している。「私ハマズ幾百圓くれても右様の社へハはいらぬ積に御座候」(明治 25 年 10 月 19 日)²²⁾。

これは、子規が陸に対する信頼だけが言わしめているものではなく、『日本』が『朝日』や『国会』などとは違って「独立新聞」だからである。

周知のように、子規は俳句家でありながら、知識欲と好奇心あふれる。また、西欧諸国における民衆と愛国心の関係を論じて日本との比較に及ぶ、そこに子規の警世家的面貌があらわれている。子規の『日本』紙を選択した理由は、一般にそれらと無関係ではないと考えられている。明治 33 年 (1900 年) 2 月 12 日、子規は、夏目漱石宛ての手紙で、陸の厚情に感じて涙をながしながら、「徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ餘リ類ガナイト思フ」²³⁾と書いている。

明治 27 年 (1894 年) 2 月 11 日、『小日本』という新聞が創刊された。主編は陸であったが、『日本』での仕事を始めてから 1 年にも満たない子規を、新聞『小日本』編集長に起用した²⁴⁾。『小日本』の創刊は、日本政府による『日本』への幾度にも及ぶ休刊処分への抵抗でもあった。

『小日本』の発刊は、『日本』に対する停刊処分への反抗であったが、実は、『小日本』の創刊の前、まず、『大日本』と名付けた新聞を発行していた。しかし、「“大日本”というのをこしらえて代わりに出すと、これがまたすぐ停止を食ってしまう」(古島一雄『古島一雄清談』)²⁵⁾。創刊は明治 24 年 (1891 年) 11 月 23 日であったが、廃刊日などの具

21) 加藤恒忠 (1859-1923)、外交官、政治家、衆議院議員、貴族院勅選議員、松山市市長。

22) 子規全集 第十八巻、講談社、1977 年、pp.386-387。

23) 子規全集 第十九巻、講談社、1978 年 p.482 参考。

24) 子規を推したのは古島一雄、その理由は、常の文士と異なり常識があつて偏していないことや、時事問題を俳句に応用できる手腕を認めたことによる、という。『古島一雄清談』、1951 年、参照。

25) 『古島一雄清談』、1951 年の第 44 頁を参照。

体的な資料についてはほぼ残ってないため、確認できない²⁶⁾。結局、『大日本』も長く続かず、二度易名して、『小日本』となった。

この『小日本』は『日本』の「別働隊」とも言える。創刊号は特別に五万部刷られた²⁷⁾。『小日本』の紙面体裁は縦 47.3 センチ、横 35 センチ。発行から 5 月 14 日まで、一部は 1 銭 5 厘で、一か月料金 25 銭。5 月 15 日から 7 月 15 日までは、一部 1 銭 5 厘、一か月料金 30 銭であった。

『小日本』の基調は平易で美しい。この小紙では漢字に振り仮名を付け、さらに、イラストも添えられた。一見では、人に親しみのある「家庭」型新聞である。子規は『小日本』に自分の小説、俳句へのコメントや紀行文などを掲載したほか、当時文芸界の有名な作品も掲載した。例えば、斎藤緑雨の小説、高浜虚子の紀行文、中村不折のイラスト、飯島謙虚の浮世絵師列伝などもあって、新聞紙面は全体的に文芸的な気配を放っていた。そして、子規はこの『小日本』を通して「俳句革新運動」を推進した。

子規はかつて、俳句を非難する人に次のように語っていた。

「俳諧は何の用をか為すと問ふ者あらば何の用をも為さずと答へん。何の用をも為さぬ者は即ち無用の者なり。無用の者を作るは作らざるに如かずといふ者あらば其人に之を作らんことを進めざるべし。されども無用なるがために吾は之を捨てず。無用なるは有害なるに勝りたればなり」²⁸⁾。

だが、経営不善のため、同年 7 月 15 日、約 5 か月間で、『小日本』は廃刊となった。

陸は、国民意識の中の感情の部分を大いに意識しており、子規に委ねた『小日本』にもそうした位置づけを与えていたであろうことは、「世界的理想と国民的観念」(明治 23〔1890〕年 1 月 7 日第 270 号)で、大要以下のように言っていることから伺える。すなわち、——国民の生活には二様の性質がある。一つは知識上の生活、一つは情感上の生活である。知識上の生活というのは、政治、法律、経済上の生活で、国によってその応用に多少の差異はあっても、通義のうえで大差はない。これに反して情感上の生活は、儀式、風俗、文学のごとき、趣味、習慣、気質に由来するもので、国民によって流儀のちがうことは、西欧先進国でも変わらない。知識上の生活は世界的理想の区域に属し、情感上の生活は国民的理想に属する。いまの日本は前者の改革につとめるのみならず、後者の変革にも熱中している。しかし、国民の文化上の生活はつねに政治上の生活の根基である。英国人が属邦を占領するとその小学校に英語を教え、ロシアがポーランドを分領するや、ロシア語を教えるがごときは、完全な征服が、国民独立観念の元素である文化上の生活を同化しなければ果たされないからである。²⁹⁾

26) 現在、『大日本』の原紙は五号分(八、九、十二、十四、十五号)だけしか残っていない。

27) 『日本』明治 27 年 2 月 4 日第三面に掲載の『小日本』の広告に「特に五万部を刷出し」とある。

28) 『子規全集 第四巻』、1975 年、p.567 参照。

実は、陸は歌にも関心があった。子規との間には歌についていくつか共通の考え方が存在したとも考えられるが、陸の主とするところは政治であり、文学のことにはそれほど自信も執着もなかったであろうから、ここではそのように推論するに過ぎない。

逆に、子規の文学革新についての意見は、陸のその政治上の反政府的な反藩閥的な態度と合流しえるべき要件を備えていたとも言えよう。

『日本』の政治上での論調は、主に「対外強硬派」、「条約例行」であった。紙面を追うと一目瞭然であるが、『日本』に掲載不可の政治関係の文章を、できるだけ『小日本』に掲載したという操作が行われている。『日本』はできるだけ政治面での「マイナスイメージ」による停刊処分を避けようとしていたのであり、「別働隊」としての『小日本』は、幾度となく新聞『日本』主張の代弁者となった³⁰⁾。

同時に、日本政府による『日本』への圧力は凄まじくなり、その余波は『小日本』にも及び、前後2回停刊処分を受けていた。

こうした状況において、日清戦争の前夜、明治27年(1894年)7月15日、『小日本』は経営不善のため停刊した。日本新聞社の古島一雄は、当時の子規をさして、「君の一生は概して不幸であったが、若し其中に於て得意時代なるものがあつたとすれば、此時こそ先づ得意であつたと云わねばならぬ」³¹⁾と記している。

五、子規における〈古代発見〉

『小日本』は、子規にとって「得意時代」であるばかりではなかった。それは、子規の文学観を大きく左右することになる人物との出会いの場でもあった。

明治27年(1894年)3月、子規と中村不折は『小日本』編集部で初めて会った。この出会いは、二人にとってともに大きな転機となった。

二人が出会った年の秋、子規は不折に油絵の「写生」を学んだ。そして、この「写生」の方法を自分の俳句創作のなかにも取り入れた。それが単純素朴なデッサンのような写生とは異なることは言うまでもない。「写生の技術」はむしろ重要であるが、ここで最も重視とすべきは、「写生の態度」である。これは、また自然に対する目の深化でもあった。子規にとって「写生」は実に重要であり、「写生の方法」を自分の俳句の手法となる原理として取り入れるだけでなく、自分の絵にも適用した。その意味でも、子規は不

29) 西岡長寿、植手通有編『陸羯南全集 第一巻』、1968年 pp.374-375 参照。

30) 明治27年(1894年)3月13日からは論説の掲載が始まる。執筆は、『日本』編集長の古島一雄が毎日一時間程小日本新聞社へ出向き担当したものである。論説の内容は、政府の施策や外交問題、教育、学芸な度にわたるが、特に政治面での論調は『日本』が主張する〈対外硬派〉や〈条約励行〉といった内容をほぼ踏襲したものであった。このことが、のちに発行停止の処分を受ける原因となった。

31) 浅岡邦雄(解説)『小日本 別冊』、1994年、p.1 参照。

折に対して感謝と恩義があった。

明治 28-29 年 (1895 から 1896 年まで) の間に、子規の脊椎カリエスが悪化したため、子規の俳句創作に、新しいチャンスが訪れた。病の悪化に苦しみながらも、すでに人々から忘れられていた俳人と謝蕪村を「発見」した。これは実に偉大な功績であった。

蕪村の特色を顕示するため、芭蕉への評価はあまり合理的ではなかったといわれているが、子規は自分の好みによって、周知のように、芭蕉を「歴史的普遍性に欠ける」と評価した。これは、「芭蕉と蕪村の逆転的な評価」であるとも言われた。

子規はこの「逆転評価」によって、日本伝統的な美の、最も重要な部分を捨ててしまったとされているのだが、明治 30 年 (1897 年)、子規は、新聞『日本』で「俳人蕪村」を連載した。これは、先行研究が全くないもとで書かれたきわめて優秀な評論文であるとされている。

さらに、重要であるのは、子規は蕪村を通して、おびたしい意義のあるものを吸収したということである。これによって、蕪村は芭蕉のつぎに、俳句界において重要な俳人となった。

もし、子規が不折に出会わなかったら、蕪村を発見することもなかった。なぜなら、不折の影響あればこそ、子規は「写生」を以て過去の俳句を再確認できたからである。

偶然に蕪村を発見したのかもしれないが、蕪村の俳句の中に「写生」を見出すと、直ちに、子規は「写生」を自分の創作の中にも用いていくことになる。これが子規の俳句に独特なスタイルを確立させた。

子規は芭蕉の『七部集』を通じて俳句に対する理解を深めたが、後には蕪村を明治新俳句の理想として大いに讃えた。自然美に魅了された子規のその性格と資質は、病状悪化によって、最終的には、蕪村からだんだんと離れさせることになり、芭蕉の境地に戻ったともいわれている³²⁾。

明治 31 年 (1898 年) の 2 月 22 日から 3 月 4 日の間、31 歳の子規は、『日本』に『歌よみに与ふる書』を連載し始めた。子規は俳句の方法として、「写生」のほか「取り合わせ」という技法も提唱した³³⁾。俳句の方法としての主流は「写生」であったが、「取り合わせ」は初学者の方法と見られていた。

芭蕉の『去来抄』³⁴⁾の中で、「は句は物を合はすれば出来せり。其能く取合はするを上手といひ、悪敷を下手といふ」と言っていた。そして、芭蕉は「青柳」と「泥土」と「取り合わせ」で、「青柳の泥にしだるう潮干かな」という句を作った。また、「古池や

32) 飛高隆夫の『正岡子規の俳句革新——写生と伝統の問題』(1999 年)の 131 頁を参照。

33) 正岡子規、『歌よみに与ふる書』、2012 年、pp.44-45、参照。

34) 掘信夫、「去来抄」、日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』(簡約版)岩波書店、1986 年/尾形仂、白石悌三、山本健吉、外山滋比古他、尾形仂、白石悌三編、「去来抄」『俳句・俳論』鑑賞、日本古典文学(角川書店)第 33 巻を参照。

蛙飛び込む水の音」もその代表作である。

子規は『病床六尺』第82段では、「破袴弊衣も配合と調和によりては縮緬よりも友禅よりも美なる事あり」とも歌った³⁵⁾。たとえば、子規が死去の直前に書いた、「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」と「をとゝひのへちまの水も取らざりき」、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」との三句は、ともに、「取り合わせ」の技法を用いた。「へちま」と「痰」を合わせて、汚れたものを美的芸術的に昇華した。

そうしたなか、『歌よみに与ふ書』において、子規は、『古今集』の「和歌」への評価は、『古今集』を「くだらぬ集」と断じ、紀貫之を「下手な歌よみ」と酷評した。それが「古代文化への再発見」ともいえるのは、逆に、『万葉集』には高い評価を与え、万葉への回帰と写実の大切さを説いていたからである。

もっとも、子規の『歌よみに与ふ書』より2年前には、外山正一が『新体詩抄』において、「万葉の歌は古今集の歌より優れている」としていた³⁶⁾。三上参次と高津鯉二郎の万葉集を高く評価する本も、『歌よみに与ふ書』より8年も前にすでに公表されていた³⁷⁾。

すると、子規の万葉集再評価のいったい何が優れているというのであろうか。それは、子規には、万葉集を評価するはっきとした思考性が存在したことにこそある。

子規はその「文学」の中によく「国民」という言葉を使っている。子規にとって、和歌と俳句の「文学化」は同時に、和歌、俳句の「国民化」にほかならなかった。

子規が、「古今集をくだらぬ集」と断じた時、それはすでに当時の日本知識分子の間の一つの常識であった。子規の言論はなかでもさらに激しく極端であった。個人と歴史社会との関連をどう把握していくのかという問題において、子規は「個人」を「国家・民族」に変換させたからである。子規のこの一歩は遅れた一歩ではあったが、そこにははっきとした、個人と歴史社会とへの認識があった。

これをさらに一歩進めて考えれば、陸と出会い『日本』で仕事をし始めた時から、日本人の情感上の生活における「国民」の観念を考えざるをえなかった子規が行った和歌と俳句の「文学化」は、同時に和歌、俳句の「国民化」でもあった。

明治32年(1899年)12月、子規は自ら選者となって、『日本』紙上において短歌の募集を行った。これが短歌革新運動の開始であったともいわれている。

俳句の方は一応出来上がったので余力を短歌の方へも及ぼしたわけではない。子規の文学活動の本質は、どこまでも革新的文学運動の一部門として、短歌に全力を注いだと言うべきであろう。

35) 正岡子規、『病床六尺』、2012年、pp.134-135、参照。

36) 品田悦一、前出2001年、p.38参照。

37) 品田悦一、前出2001年、p.25参照。

色々の事情はあったとしても、これ以後の子規の短歌革新運動を、『日本』が全面的に受け入れ支障なからしめたことをどのように評価するのか。『日本』が国粹主義ではあってもなかなか進歩的であったということを認めなければならないと同時に、子規の最晩年、とくに、その後に受けた子規門流らの国粹的、擬古的偏向というものの依って来るところも考慮されるべきであろう。

子規の歌論は、一般に、一面ではその広い文学観によって論を進め、一面では実作者としての細かい技巧論を持っているとされる。この『歌よみに与ふる書』は、そういう二面的な歌論の代表的なものである。一面では文学としての常識論であるから、何時になっても訴える力を持っている³⁸⁾。すでに述べたように、『古今集』を和歌の聖典としてきた千年近い歴史が持つ価値観を転倒させ、万葉の歌風を重じ、現実写生の原理を究明した子規の歌論は、一つの衝撃であった。その衝撃には和歌改革への情熱が漲っている。

先述したように、日清戦争の始まる明治 27 年（1894 年）に陸奥宗光外相が治外法権を回復し、明治 37 年（1904 年）からの日露戦争によって列強と肩を並べ、明治 44 年（1911 年）に小村寿太郎外相の下で関税自主権が完全回復される。日本は明治 28 年（1895 年）の下関条約によって台湾を、明治 38 年（1905 年）のポーツマス条約によって南樺太と関東州をすでに領有していたが、台湾統治は幸運な例外と呼べるほど順調に行われ、このことは以後の植民地経営について日本政府の見方を甘くした。明治の最晩期、明治 43 年（1910 年）に行われた韓国併合が日本の大陸進出の足がかりとなった。

『万葉集』の「素朴・雄渾・真率」の歌風は、大正時代から昭和戦前の日本政府が大国を支える日本国民の理想像を表象した。そして、戦時下の教育では、万葉集における「日本人の資質」は軍国主義に基づいた国家のプロパガンダに乱用されることになる。『万葉集』が当時の出征兵の携帯する書物の代表であったのもそのためである。

六、むすび

子規は『祭書屋俳話』の中で、「俳句の前途」についてこう言っている。

「人問うて云う。さらば和歌俳句の運命は何れの時にか窮まると。対へて云う。其窮り尽すの時は固より之を知るべからずといえども概言すれば俳句は已に尽きたりと思うなり。よし未だ尽きずとするも明治年間に尽きんこと期して待つべきなり。」³⁹⁾

こういう表現で子規は彼の俳句革新の決意を語ったのである。

子規の俳句革新とは、従来の俳句という「文学」の改革ではない。天保以来の月並宗

38) 正岡子規、『歌よみに与ふる書』、2012 年、土屋文明の解説を参照。

39) 『子規全集 第四巻』、1975 年、p.166, 参照。

匠たちが歌っていた俳句は、日本生活の因習そのもの、「文学」以外のものであり、「非文学」的なものであった。この「因習」を「日本国民の文学」⁴⁰⁾に変革するのが、子規俳句革新の目的であった。

学生時代自由民権運動に熱心だった子規のこの仕事が、『日本』や『小日本』紙上で始められた時、その革新運動は、先述のように、日本人の情感上の生活における「国民的観念の発揮」（陸羯南）に見合う意味をもっていた。

以上のように、子規の『万葉集』などの「古代文化の再発見」によって、「日本人」を組み立てていく要素を文学者たちが創作していくことによって、〈日本人の境界〉が時代状況に応じて作られていくことを確認することができる。

もちろん、それは、子規がナショナリストであったことを単純に言挙げするのではない。近代日本の形成過程の一つのある段階において、近代日本語の美的感覚をも再構築するような芸術性に高める契機がそこにあったことを論証することこそ比重がある。その後の日本がアジア侵略に転化するような傲慢とは一線を画する何かが、そこにはあるはずである。これについても今後考察を深めたいと考えている。

参考文献

【日本語文献】

- 浅岡邦雄（解説）、『小日本』、大空社、1994年。
 内村鑑三（鈴木範久訳）、『代表的日本人』、岩波書店、1995年。
 E.L. アイゼンシュテイン（別宮貞徳訳）、『印刷革命』、みすず書房、1987年。
 エリック・ホブズボウム（前川啓治、梶原景昭訳）、『創られた伝統』、紀伊国屋書店、1992年第29-72頁。
 岡倉天心、『東洋の理想』、講談社学術文庫、1986年。
 岡倉天心、『日本の覚醒』、講談社学術文庫、2014年。
 飛高隆夫、『正岡子規の俳句革新——写生と伝統の問題』、大妻女子大学紀要、1999年第3期、PP.123-131頁。
 『子規全集 第四巻』、講談社、1975年。
 『子規全集 第十八巻』、講談社、1977年。
 『子規全集 第十九巻』、講談社、1978年。
 品田悦一、『万葉の発見——国民国家と文化装置としての古典』、新曜社、2001年。
 新渡戸稲造（桜井彦一郎訳）、『武士道』、丁未出版社、1908年。
 西岡長寿・植手通有編、『陸羯南全集 第二巻』、みすず書房、1969年。
 『古島一雄清談』、毎日新聞社、1951年。
 ベネディクト・アンダーソン（白石さや、白石隆訳）、『創造の共同体』、NTT出版、1987年。
 正岡子規、『歌よみに与ふる書』、岩波書店、2012年。
 正岡子規、『病牀六尺』、岩波書店、2012年。
 三上参次・高津敏三郎共著、『日本文学史』、金港堂出版、1890年第137頁。

40) 「俳句は文学の一部なり文学は美術の一部なり故に美の標準は文学の標準なり文学の標準は俳句の標準なり即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も、みな同一の標準によって論評し得るはずである」、同上、p.342, 参照。

三宅雪嶺、『真善美日本人』、政教社、1891 年。

三宅雪嶺、『偽悪醜日本人』、政教社、1891 年。

水野広徳、『水野広徳自伝——平和を訴え続けた軍人の半生』、1978 年、南海放送。

【中国語の文献】

鮑同、趙聰・論日本“戦記物語”中の錯誤歴史観——解析《坂上雲》、中国電視、2013 年第 9 期。

柄谷行人、『近代日本文学の起源』、三聯書店、2003 年。

彭恩華、『俳壇偉大の革新者正岡子規』、名作鑑賞、1985 年、第 3 期。

品田悦一、『万葉集の発明——作為国民国家和文化装置の古典』、香港：香港教育出版、2004 年。

張秀強・甲午戦争中近代日本文人の戦争観、東北師大学報、2009 年第 2 期。